

名古屋 文化情報

2020
9・10
September / October

No. 394
NAGOYA
Cultural
Information

随想／小嶋 彩子（俳優）

視点／新型コロナウイルスと美術館の試みを巡って

この人と…／杵屋 六秋（長唄・唄方）

ピックアップ／「演劇緊急支援プロジェクト」と「はじめの半歩プロジェクト」

いとしのサブカル／兼岩 孝（少女漫画偏愛主義者／会社員〈土木屋〉）



2020

9・10

September / October

Contents

名古屋市民文芸祭 小・中学生の部 受賞作品…………… 2

随想 「次は清作ちゃん」
小嶋 彩子(俳優)…………… 3

視点 新型コロナウイルスと美術館の試みを巡って…………… 4

この人と…
杵屋 六秋(長唄・唄方)…………… 6

ピックアップ
「演劇緊急支援プロジェクト」と「はじめの半歩プロジェクト」… 10

いとしのサブカル
僕らが能天気には踊っていた時、そこでは革命が進んでいた
兼岩 孝(少女漫画偏愛主義者／会社員(土木屋))…………… 11

おしらせ…………… 12

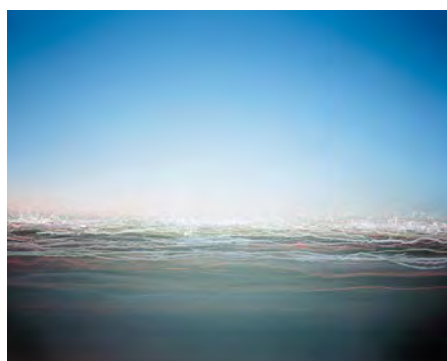
表紙

作品

相対的な風景1

(2019年/写真/65×90cm)

進行方向の横にカメラをかまえ、風景と平行に移動しシャッターを開けたまま撮影した。近くは早く動き遠くはゆっくり動く。角度が動けば近くは少し動き遠くは大きく動く。運動視差と角度で空間を認知した作品。



尾野 訓大 (おのくにひろ)

略歴

- 1982年 愛知県に生まれる。
- 2007年 名古屋芸術大学大学院美術研究科修了
- 2012年 中川運河 写真(名古屋都市センター)
- 2019年 パラランドスケープ(三重県立美術館)
- 2020年 アインソフティスパッチ(名古屋)

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 杵屋六春 (長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 濱津清仁 (指揮者)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽおと代表)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座 制作部長)

「2019年 名古屋市民文芸祭」
〔第七十回名古屋短詩型文学祭〕小・中学生の部
川柳の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆ 東海市立加木屋南小学校5年

本読んでおぼえたことは無限大 ペデイ結合

◆市会議長賞◆ 東海市立加木屋小学校6年 早川友規

ありがとう命の水に感謝する

◆市教育委員会賞◆ 椋山女学園大学附属小学校4年 田代美羽

ポケットに砂のお土産くれる波

◆市文化振興事業団賞◆ 名古屋市立供米田中学校3年 渡辺美愛

背伸びせず屈みもせずに前を向く

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆ 名古屋市立あずま中学校3年 隅田武志

夏色に輝いている僕の汗

◆中日賞◆ 名古屋市立相原小学校 トワイライトスクール3年 筒井秀策

水かきが泳ぐときだけあるといい

随想

「次は清作ちゃん」



こ じま あや こ
小嶋 彩子(俳優)

主な主演作は遠山事務所「いのちぼうにふろう」「どん底」「道」「飢餓海峡」など多数。劇団スイセイ・ミュージカルの全国ツアー「楽園」はじめ3作品に出演。名古屋市文化振興事業団企画公演にはミュージカル「オズの魔法使い」「ザ・ミュージックマン」など5作品に出演。名古屋の演劇人が贈る名作劇場「煙が目にしみる」野々村礼子役。『時代横町』、『戦争を語り継ぐ演劇公演』出演。第1回アクテノン記念 江崎演劇賞受賞。

「次は清作ちゃん」

舞台での初台詞。私が今、舞台に立っているのはこの台詞のおかげかもしれません。

小学校4年生の学習発表会で「野口英世」の劇をしました。私は引込み思案で内気、自分の気持ちを言葉で表現するのが苦手な子どもでした。だからなのか、「何か」がやりたかったのでしょうか、配役を決める時は進んで手を挙げていました。でも人気の役にはなれなくて、何とかもらえたのが野口英世の子ども時代の友達の役でした。

「清作^{せいさく}」とは野口英世の幼名。数人の子どもたちが相撲で遊んでいて清作の順番が回ってきた時に言う一言。しかしこの後、いじめっ子たちによって清作は相撲をさせてもらえなかった、確かこんな感じの一場面。

野口英世がいじめられっ子だったことを表現するシーンでの唯一の味方というか中立の立場の友達役だったことも子どもながらに気に入っていたのですが、何より稽古中に褒められたことがとても嬉しかったんです。体育館の一番後ろで見ていた学年主任の先生が、私が台詞を言った時に、「とても大きな声でいいよ!」と言ってくれました。胸が熱くなってドキドキしたのを今でも覚えています。

今振り返ると、この時私の中に「舞台に立ちたい」という想いの小さな種が蒔かれたのではないかと思

います。幼い頃習っていた日本舞踊やピアノ、中学の部活で始めた吹奏楽、高校で習った声楽、短大では日本民謡と和太鼓のサークルで活動、社会人になってからも自分のやりたい「何か」を探して、バンド活動をしたり、市民バンドで吹奏楽を続けたり、声楽の個人レッスンを受けたり、短大のサークルの先輩のいる劇団に顔を出したりしていました。ミュージカルなど舞台を観るのも好きでしたが、いつの間にか観客席ではなく向こう側へ行きたいと思っている自分に気づいて驚きました。あまりに無謀な夢なので「舞台に立つなんて私なんかには無理無理」と諦めていました。

しかし小さな種が芽吹きはじめました。27歳、どうしても諦めきれなくてお芝居の勉強を始めたのです。そして今に至ります。言葉でうまく自分を表現できない分、歌や楽器や踊ること、そして台詞の力を借りて表現しているのだと思います。「何か」を探してただ闇雲にやりたいことをやっていた頃にはバラバラだと思っていたことが、「舞台」に出会い、見事に繋がりました。全てが生かせるのです。小学4年生の頃蒔かれた種がようやく若葉となったような気がします。これからも出会いや経験を生かし積み重ねながら大切に育てていきたい、ゆっくりコツコツ一歩ずつ。

新型コロナウイルスと美術館の試みを巡って

美術を巡るウィズ (With) コロナ時代の新しい生活様式。新型コロナウイルス感染拡大が続く現状にどう動いているのかを美術館を中心に取材した。
(まとめ：鈴木敏春)

新型コロナウイルスの猛威

2019年11月に中国・武漢市で報告された原因不明の肺炎は、「COVID-19」（新型コロナウイルス感染症）と名付けられ、いまや世界中に拡散。日本にとって、新型コロナウイルス対策で最初の大きな試練となったのは、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」号の集団感染でした。2020年3月以降、東京などを中心に感染急増を受け、国や愛知県などで「緊急事態宣言」を発出。感染拡大防止を自粛要請などで呼びかけました。その後、愛知県の緊急事態宣言が5月31日に解除され、美術館や博物館、図書館などが再開しました。しかし新型コロナウイルスの感染は、首都圏を中心に増える傾向で、とても収束など見えません。その中で先行する形で美術館などの公共施設の開館が始まっています。



名古屋市美術館

一方、名古屋市美術館では同館、中京テレビ放送、読売新聞社などが主催の「みんなのミュシャ ミュシャからマンガへー線の魔術」展(4月25日～6月28日)が新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止になりました。それ以後も特別展「アートで旅するなつやすみ サマー・エスケープ」や、1972年までの名古屋写真運動史を扱った「『写真の都』物語 一名古屋写真運動史：1911-1972-」が先送りとなりました。学芸課長の井口智子さんによると、名古屋市美術館は新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館に続き、現在は今年11月から予定していた外壁改修工事を前倒して行っており、休館しているとのこと。臨時休館に入った際には、インターネットを利用した所蔵品鑑賞やぬり絵の提供を行いました。ネット活用の充実の必要性を感じたとのこと。す。



「みんなのミュシャ」名古屋展

感染拡大予防ガイドライン

公益財団法人日本博物館協会は2020年5月14日に指針「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」（以下「ガイドライン」）を発表しています。新型コロナウイルス感染拡大が続く中、多くの博物館や美術館の関係者が感染拡大防止のために努力しています。「入場者の制限や誘導」「手洗いの徹底や手指の消毒設備の設置」「マスクの着用」等の要請を行うことを含め、「三つの密」を徹底的に避けること、室内の換気や人と人との距離を適切にとることなど感染防止対策を講じて開館する必要があります。新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の提言により、厚生労働省より『新しい生活様式』という言葉が示されました。この『新しい生活様式』は今後の新型コロナウイルスとの共存を含めた文化に対する指針となるのでしょうか。



手指用消毒液(アーツ前橋)

「新しい生活様式」へのチャレンジ

NHKの日曜美術館では「美術展でのアートとの新しい付き合い方」について特集を組んでいて、自前のコレクションという新しい地域主義(?)が創造の中心体験として紹介されていました。また2020年6月28日放映の日曜美術館では、3月にリニューアルオープンした京都市美術館(ネーミングライツ契約により、通称が京都京セラ美術館となりました)をはじめ各地の美術館の取り組みを紹介。地域での美術のあるべき姿としては賛否両論もあることですが、深い議論になるのが望ましいと思われ。番組からは美術館の建築様式の活用や、従来から所蔵していた美術館のコレクションと現代美術作品とのコラボレーションなど、非常に苦勞の跡が見られました。また、地元作家の掘り起こしや、企画の充実を図る必要性を痛感しました。まさにこれからが学芸員の方たちの腕の見せ所ですが、新しい取り組みは始まったばかりです。

充実するコレクション展

県内に目を向けると岡崎市美術博物館では企画展「岩合光昭 写真展 どうぶつ家族／ねこ科」が中止となり、収蔵品展「贅沢な対話」（6月2日～ 7月12日）が開催されました。3名の学芸員により2週間ずつ入れ替えて展示された作品はコレクションの一部が東西の出会いとして展示されました。写真は学芸員の今泉岳人さんの展示。非接触型体温計で入場者の体温を測定し、アルコール消毒にマスク、透明ビニール幕、鑑賞間の距離を保ちました。展示品情報は出口の空間でポストカードにして配布。日本博物館協会のガイドラインに沿った展示でした。これが新型コロナウイルスを経た、今後の展覧会の常態となるのでしょうか。



岡崎市美術博物館／Sam Francis "Untitled", 1988

次に紹介するのは、高浜市やきものの里かわら美術館。「過去と未来を紡ぐもの」展は緊急事態宣言解除後、会期が7月19日まで延長。若松文人館長に、現在の美術館を巡る状況などをうかがいました。この展覧会は今泉岳大さんが企画を担当。今泉さんが岡崎市美術博物館に移ったので安井海洋学芸員に案内していただきました。新型コロナウイルス感染拡大の再燃の可能性もあり、新聞社やテレビ局との共催は見込みが立たないので、館収蔵作品の展示に取り組んでいます。逆転の発想で地元、地域の所蔵品の掘り起こしに取り組みました。版画や文学が専門の安井さんから半田市亀崎地区での版画教育や山本鼎の版画集など興味深い話をうかがうとともに展示作品を拝見しました。高浜市やきものの里かわら美術館の収蔵作品は写真や版画なども充実しています。新型コロナウイルスの影響が地域文化を掘り起こし、内容を深めていく機会となっていると実感しました。



高浜市やきものの里かわら美術館

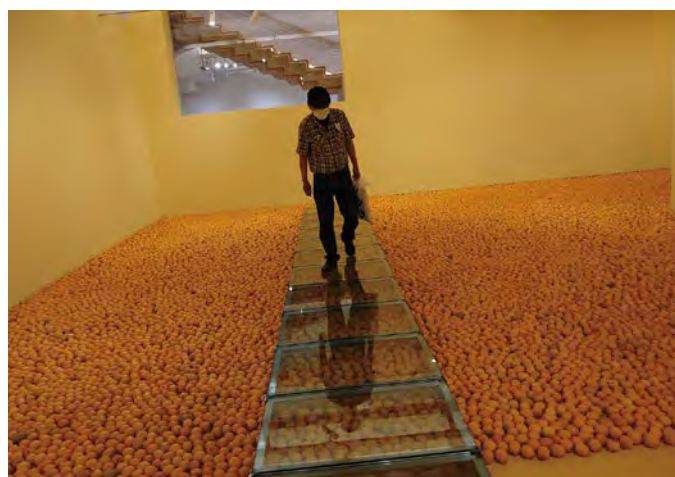
刺激的な取り組み

今回、地方の美術館ながら刺激的な取り組みで話題になった展覧会があります。嗅覚を刺激する作品などで知られるアーティスト・廣瀬智央氏の初となる大規模個展「地球はレモンのように青い」。初期の作品から、23年ぶりに日本で再制作する《レモンプロジェクト03》や、イランの遊牧民と共作した《マーレ・ロツン》など新作を加えて一挙に展示（群馬県・アーツ前橋、6月1日～



「地球はレモンのように青い」展 入口

7月26日）。廣瀬氏は1963年東京生まれ。1989年の多摩美術大学卒業後にイタリア政府給費奨学生として渡伊し、ポーラアート財団の研究奨学金を得てミラノ・ブレラ美術アカデミーを修了。美術運動「アルテ・ポーヴェラ（貧しい芸術）」の代表的作家ルチアーノ・ファブロに師事。現在は、ミラノと東京を拠点に活動。《レモンプロジェクト03》は全身で感じる作品。その他の作品も自分らが住む世界や日常生活に潜む小さな事柄の豊かさに目を向けさせます。使用したレモンは展覧会終了後、石鹸や紙へと再生するエコロジーの視点から、作品の循環についても考えさせられます。まさにパンデミックを招きかねないグローバルな時代にピッタリといえるでしょう。あわせて廣瀬氏の特筆すべき活動として「アーツ前橋」と共に進めている「タイムカプセルプロジェクト」を紹介します。群馬県前橋市内の母子生活支援施設「のぞみの家」の子どもたちや母親と空の写真を交換し合うプロジェクトです。それは生きること、感じることは何かという疑問を、普段の生活の中から改めて問いかけます。



「レモンプロジェクト03」

アートの在り方に問いかける

新型コロナウイルスの影響による『新しい生活様式』はアートの在り方を根本的に問い直すことになりました。大手の新聞社やテレビ局による海外有名作家の外向型の展覧会、いわゆる「パックもの」の展覧会は、海外からの作品も人の動きもままならない状況にあり開催そのものが危ぶまれます。そうであれば、内向型の文化に光をあてることにつなげていかなければなりません。普通の人間が関われるアートが求められています。

この人と...



優しさとおおらかさの中に、凛としたたずまいを見せる杵屋六秋さん

「鐘に恨は数々御座る、初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり」。日本舞踊の名作「娘道成寺」でうたわれる長唄である。「旅の衣はすぐかけの、露けき袖やしぼるらん、是やこの行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の〜」。こちらは歌舞伎の人気狂言「勸進帳」でうたわれる長唄である。日本の古典芸能には欠くことのできないのが、この長唄。名古屋地区邦楽界の第一人者、杵屋六秋(本名・廣瀬栄子)さんの登場である。(聞き手：上野茂)

長唄・唄方

きね や ろく しゅう

杵屋 六秋 さん

「長唄」は、慣れればクセになる!?

最初に「長唄」について、私の認識を書かせていただく。

長唄は、その名の示す通り「長い唄」である。20分、30分、40分を超える大作も珍しくない。三味線、鳴物(なりもの=打楽器)に乗せてうたわれる旋律は、洋楽の教育を受けてきた現代人には、少々異様に感じられる。むしろ日本語でうたわれているのだが、初心者が理解するのは難しい。その点はオペラに似ているといえる。だが、ある程度聴き慣れて来るとクセになる。これもオペラと同様だ。

では、どこへ行けば長唄が聴けるのか一、無理なく長唄を知る方法はあるのか一。答えは「日本舞踊や歌舞伎を見ること」。日舞の美しい衣装や踊り、ドラマチックな歌舞伎の立ち居振る舞いを楽しむうちに、長唄の面白さが分かってくる。分かってきたら、長唄の各会派が主催する演奏会に出掛ければよい。松竹歌舞伎の入場料は高いが、日舞、長唄の公演は比較的安価で、無料公開の公演も少なくない。以上が筆者の体験に基づく、長唄についての考察である。

人間国宝・杵屋六左衛門さんに師事

——では最初に、六秋先生の生い立ちをうかがいます。生年月日、出生地、どんなご家庭だったのが、家族構成などをお聞かせください。

「私は1944(昭和19)年1月24日、東京の港区で生まれました。私は9人兄弟の上から3番目。当時ほどの家も子たくさん大家族でしたね」

——その子どもたちが、経済復興の要になったんですね。ところで六秋さんが最初に長唄を学んだのはどなたからだったのでしょうか。

「3歳の頃、私たちは母の在所(実家)がある愛知県新城市に



昭和40年代後半、六秋さんの義母・六左多さんが主催した「秀芳会」(中電ホール) 実母の六歌さん(右端)、六秋さん(中央)

昭和40年代後半の「名古屋杵六会」(愛知文化講堂)



廣瀬豊治さんとの結婚式(昭和42年2月11日、八事・八勝館)

移りました。生活も落ち着き、最初に手ほどきを受けたのは母(杵屋六歌)からでした。ところが父は三味線の音色が好きではなかったようで、私や母が稽古を始めると『うちは置屋(今でいう、芸者のプロダクション)じゃない!』って怒るんです。仕方がないから、母と私は、父が寝入ってから稽古をしたんですよ(笑)。そんなこともあり、高校卒業後の1962(昭和37)年に、長唄宗家14世・杵屋六左衛門先生(1900—81年、重要無形文化財保持者(人間国宝)・芸術院会員)に弟子入りするために上京しました」

—すごい。人間国宝の先生から、直々に手ほどきを受けたのですね。

3畳の布団部屋で内弟子修業

「住み込みの内弟子になるつもりでした。何度も断られたのですが、そのうち根負けされたのでしょう。願いがかなって5年間、六左衛門先生のお宅で修業させていただけることになりました。

—内弟子生活はいかがでしたか。

「私に与えられたのは3畳ほどの布団部屋。弟子は家族ではないからと、風呂には入れてもらえませんでした。仕方がないので銭湯に通いました。稽古に来るお弟子さんたちは芸者さんや芸能人。自分のいる場所ではない気がして、何度も新城へ戻ろうかと思ったものでした。でも六左衛門先生の唄を聴くとやめられない(笑)。私は通いのお弟子さんの稽古を見聞きして、自分なりに楽譜を起こして勉強しました」

—ドラマチックですね。その結果が今の六秋さんにつながっているわけですね。

「六左衛門先生から、5年も続いたのは、あんただけだよと言われました。そして『杵屋六秋』の名をいただきました。5年間、辛抱して良かった。天にも昇る気分でした。勉強すればするほど長唄が好きになりました」

古典邦楽界に訪れた新時代

—で、内弟子修業後に、名古屋で六秋さんを待っていたのは…。

「はい、六左衛門先生の勧めで、名古屋の二代目・杵屋六左多家に嫁ぐことになりました。長唄を続けるためでした。夫とは前年に見合いをして、翌年23歳で結婚。その間、2度ほどしか会いませんでした。そんな時代でしたね。六左衛門先生ご夫妻が、最初で最後の仲人をしてくださいました。大変幸せでございました」

御園座開館記念「名古屋邦楽大会」。六秋一門で「越後獅子」を演奏(平成30年11月25日)



——新婚生活はいかがでしたか。

「廣瀬家は大所帯。長唄の跡継ぎとして嫁入りしたはずなのに、まるで使用人でした。当時の嫁はそれが普通でしたね。でも、そんな頃から、徐々に時代が変わり始めたのを実感できるようになりました」

——具体的には？

「文化センターが開設され、古典の間口が広がりました。西川流の『名古屋をどり』に六左衛門先生の新作が上演されることになり、そのご縁でうたわせていただくことになり、一気に視界が開けました。西川鯉三郎先生、花柳寿江弘先生、内田り子先生…。さまざまな日舞の先生方に可愛がっていただきました。

——そして六秋さんは2人のお子さんを授かりました。

「1968(昭和43)年に長男、3年後の1971(同46)年に幸江(後の六春)が生まれました。長男はとても良い声をしていましたが変声期でリタイアしてしまいました。幸江は皆さんご存知の通り、私の後継者として成長してくれました」

【六春さんの独白】

長唄はわが家にとって家業でした。でも私は長唄が好きではありませんでした。稽古と家事との両立、人間関係に苦労した祖母や母を見ていたからだと思います。母は私に同じ苦労をさせたくなかった。だから私を大学(東京藝術大学)に進学させて将来の可能性を広げてくれたんだと思います。藝大で学んだことで、これまでとは違った流派の長唄を学ぶこともできました。名古屋音楽大学の講師として、若い後進たちに邦楽の魅力を伝えることができるようになったのも、藝大に行かせてもらったおかげです。両親に感謝しています。もちろん今では長唄が大好きですよ(笑)。

娘の六春さんと「長唄おやこ会」

——六秋さんは1995(平成7)年から毎年、六春さんとともに「秋栄会／長唄おやこ会」(無料公開)を開催。四半世紀にわたって、市民に長唄の魅力を紹介。1995年と2008年の公演が「名古屋市民芸術祭特別賞」に選出されています。



平成19年「ハワイホノルルフェスティバル」。
毎日文化センターの生徒と演奏(ワイキキビーチウォーク特設舞台)



「G20」愛知名古屋外相会合・夕食会文化行事での演奏。
右から杵屋彌四郎さん、六秋さん、六春さん(令和元年11月22日)

「私の一門である秋栄会と同時開催という形で、毎年開催させていただいています。秋栄会のお弟子さんに感謝しています。最近は六春の教え子の、名古屋音大の学生さんたちも参加して下さるようになり、舞台も客席も、若返りました。

——市民芸術祭の話が出ましたが、六秋さんは1978(昭和53)年に「名古屋市民芸術奨励賞」を、1990(平成2)年に「愛知県芸術文化選奨」を受賞されています。78年の名古屋市民芸術奨励賞受賞者を見ると、加藤典子さん(声楽)、六秋さん、庄司達さん(造形美術)、奥田敏子舞踊団(現代舞踊)という、まさ

に戦後の名古屋の文化芸術を構築したアーティストがそろっています。実は以前、加藤さん（2011年逝去）から、「六秋さんに長唄を習っている」と聞いたことがあります、本当だったのでしょうか。

「加藤さんとは、とても仲良くさせていただきました。いつのことだったか定かではありませんが、邦楽の発声にとっても興味がある。きっと勉強になるからと、短期間でしたが、うちにいらしたことがあるんです。私にとっても加藤さんの発声から学ぶことが多く、とても有意義な機会でした」



昭和53年度の名古屋市芸術賞授賞式。
授与するのは当時の本山政雄名古屋市長

枝分かれした流派も良き親類

——達人は達人を知る、ということですね。ちなみに奥田敏子さんは名古屋の現代舞踊界の始祖ともいえる重鎮で、受賞の翌年（1979年）に逝去されました。美術家の庄司さんは「布」をモチーフに芸術活動を行い、奥田さんの愛弟子でもあった、現代舞踊の野々村明子さんとコラボレーションを度々行いました。実は庄司さんは、私の高校時代の恩師でもあるんです（笑）。

さて、話を戻しましょう。長唄の世界では「杵屋」「稀音家」「吉住」「今藤」などの流派があり、「六」の付く社中（グループ）がいくつもあつたりします。これはどう解釈すればいいのでしょうか。

「たしかに枝分かれはしていますが、元は一つ。それぞれが良い意味でのライバルではありますが、敵対しているわけではなく、仲良くお付き合いしています。杵屋六左衛門家は長唄の宗家（宗家とは邦楽、邦舞などの舞台芸能の世界において、もっとも由緒正しく権威と格式をもっている家をさしていう敬称）なので、長唄界全体は、親類のようなものですね」

踊り手とのエピソードも財産

——長唄の演奏形態には、日舞と競演する地方（しかた）と、演奏だけの形態がありますが、演奏家にとって大きな違いがある

のでしょうか。

「得手、不得手はそれぞれだと思いますが、私は断然地方が好きです。自分が中心になるリサイタルは何だか恥ずかしい（笑）。地方の場合は踊りが主役ですから、落ち着いて唄と向き合えます。地方の仕事の前夜には、自分が踊るように本番の舞台をイメージして、心構えをします。それも楽しいものなんです」

——多くの地方を務めてこられて、印象に残る踊り手も少なくないと思いますが…。

「先に名を挙げた鯉三郎先生、寿江弘先生、るり子先生らの舞台には引き込まれましたね。いずれもお亡くなりになりましたが、先生方の地方を務めることができ幸せでした。流派による（踊りの）色合いの違いも印象深いものがありました。すべてが財産だと思っています」

——その逆に、微笑ましいケースもあったかと思いますが、いかがですか？

「素人さんの場合にはいろいろありますよ。踊り（振付）を忘れてしまって、私に聞いてきた人もいました。出・捌けのミスは多々あります。ある人は花道から出るはずが、なかなか出てこない。わたしはハラハラしながら唄を延ばして間をつなぎました（苦笑）」

「六秋の唄で踊りたい」と言われたい

——誰もがそんな失敗を繰り返して上達するのですね。では最後に六秋さんの長唄や舞台への思い、座右の銘があればお聞かせください。



毎年元旦C B Cラジオ「つボイノリオの聞けば聞くほど」に出演。パインとリテイのつボイノリオさん（中央）と

「いつも周囲に言っているのは、『今日のお客さんは今日しかない。しっかりうたって聴いてもらい、いい気分帰ってもらおうこと』。常々自分にも言い聞かせている言葉です。いつまでも、踊り手さんには『六秋の唄で踊りたい』といわれたいですからね。それから、うたうことは体に良いということ。少々体調が優れなくても、うたうことで元気になる。芸は身を助ける。芸は退化しない。今年はコロナ禍で毎年11月に開催する『おやこ会』が行えませんが、ぜひ、長唄に接する機会を作ってください。本日はありがとうございました」

ピックアップ

「演劇緊急支援プロジェクト」と「はじめの半歩プロジェクト」

新型コロナウイルスの感染拡大と、それに伴う国や県によるイベントの自粛要請により、2月下旬以降、数多くの劇場公演が中止となった。そんな状況の中、「演劇の灯を絶やさないために、演劇の未来のために、緊急支援を!」と、演劇関連3団体（日本劇団協議会・日本演出者協会・日本劇作家協会）が呼びかけ、4月中旬に「演劇緊急支援プロジェクト」を立ち上げた。

ネット上での署名活動を行い、呼びかけ人や賛同者は続々と増え、また演劇だけでなく映画・音楽の3者がジャンルを超えて連携。3者は#WeNeedCultureとして共同のアクションを行い、5月22日に40万筆以上の署名とともに「文化芸術復興基金創設要望書」を関係省庁に提出した。この省庁への要請とその後に行われた記者会見には俳優の渡辺えり氏や映画監督の諏訪敦彦氏などが出席し、マスコミ各媒体にも取り上げられた。また、その夜に行われたリレートークはYouTubeで生配信され10万人以上が視聴。これらの活動は文化芸術の危機を訴える一助となったのではないだろうか。



#WeNeedCultureのメインビジュアル

一方、愛知県内では6月19日～21日に長久手市文化の家 風のホールで「はじめの半歩プロジェクト」（発起人／杉本明朗 アクションクラブ中部代表）が開催された。出演団体は東海地区で活動する演劇、ミュージカル、歌、ダンス、太鼓、三味線などの13団体。

この企画の目的は、徹底した感染防止対策を施したうえで公演を行い、劇団や劇場の活動再開の後押しをすること。発起人の杉本氏は「感染拡大後、公共施設を使つての公演はおそらく日本で初だったと思います。一番大切なのは安全に幕を開けること。お客さんに、劇場は安全で楽しめる場所だということを伝えたかったんです」と。

通常の感染防止対策に加え、客席は定員の15%と大幅に制限し、最前列も空席にした。観客にはオンラインチケッ



はじめの半歩プロジェクト出演団体のイメージカット

トの利用を呼びかけ、当日は透明のフェイスシールドとアルコール除菌シートを配付。出演者同士の距離も2m以上空けるなど様々な対策を講じ、開演前には警備員の制服に身を包んだ杉本氏が「ソーシャルディスタンス警備員」として登場し、観客に注意事項を伝えた。



はじめの半歩プロジェクト アクリル板越しに歌う出演者

杉本氏は「企画がスタートした時点では、公演の案内を行うのも躊躇するような状況でしたが、クレームは全くなく客席はほぼ定員に達しました。そしてお客さんから励ましやお礼の声がたくさん届き、出演者・スタッフも全員が楽しかったと言ってきて、『みんな飢えていたんだ』と実感しました。最初の一步を踏みだすのは勇気が必要でしたが、誰かが一步踏み出せば誰かがあとに続いてくれるでしょう。次に繋がるヒントが得られたのではないのでしょうか」と語った。

（吉田 明子）

いとしの
サブカル僕らが能天気には踊っていた時、
そこでは革命が進んでいた

1955年名古屋市生まれ。名古屋工業大学卒業後、土木技術者として名古屋役所に勤務。現在、昭和土木株式会社理事、中部大学非常勤講師を勤める。
大学在学中に「SF研兼漫研（通称SM研）」を立ち上げ、大ナゴヤ大学で「少女漫画偏愛主義講座」を開催。現在、中日新聞プラスで、「少女じゃなくてもコレは読め」を掲載中。
座右の銘は「コンプリートは目指さない。」

いやあ、人生の挫折はとても楽しかった。大学に落ち続け、東京での二浪生活中に萩尾望都の「ポーの一族」に出会ってしまったからです。この衝撃は凄かった。

それまで少女漫画に縁がなかった私にとって、免疫がある訳もなく、完全にハマってしまいました。

私が浪人中だった1974年前後は、まさに少女漫画のヴィンテージ・イヤードともいう年代で、花の24年組と呼ばれる、萩尾望都、山岸涼子、竹宮恵子、大島弓子らが少女漫画の新しい地平を切り開いていく変革期でした。

この年には、萩尾望都の「ポーの一族」が単行本化され、山岸涼子の「アラベスク（第2部）」が連載開始（飲み会では、サークルメンバーでアラベスクごっこで大騒ぎ、誰も本当のバレエ何ぞ見たことがないのに、踊りまくっていた）、また2年後には竹宮恵子の「風と木の詩」が連載開始（少年同士のベッドシーンから始まる連載は衝撃的でした!）さらに2年後には大島弓子の「綿の国星」が出現、そのインパクトは少女漫画のジャンルを超えて社会に影響を広げていきます。本当に少女漫画が新たな地平を広げる年代に立ち会った訳です。

さて、奇跡的に大学に滑り込んだ私には、幾つかの出会いが待っていました。最初は、貸本屋「ネオ書房」との出会いでした。名古屋市内に生き残っていた店で、昭和区の曙通り商店街にひっそり店を構えていました。かつての貸本漫画は姿を消していましたが、月刊や週刊の少女漫画雑誌、単行本を借りまくっていました。更には、この店が、少女漫画愛好者の出会いの場としても機能していました。

第二は1975年に、「SF研兼漫画研究会」（略称：SM研）となるサークルを立ち上げたことです。私の趣味でSFをくっつけたばかりか、名称の真ん中に、私の姓の一文字『兼』を紛れ込ませるなど、やりたい放題!

サークル最初のイベントは、当時高校の後輩が参加していた東工大SF研との交流会。みんな金がないので、夜行の東京行き普通列車を利用。サークルのI君は、改札で止められました。「これは違うよ!」確認すると乗車券ではなくって、生協の食券であったというお粗末!

翌年には、ガリ版刷りの同人誌を持参し、東京のコミケットに参加。前年の食券乱用事件と大量の同人誌持参のため、中古の自家用車で東名高速を往復。当時は参加サークルも100に満たず、会場も確か板橋産業連合会館で、アニメ系の同人誌が増えてきました。開催後の反省会で、セル画を売りまくるアニメ系同人サークルの商売について批判が続出しました。我がSM研のトラブルメーカー N君の「儲けて続けるのが、同人誌の目的。悔しかったら売れる同人誌を作ったら〜」という発言に会場大荒れ—というのも懐かしい思い出。(うちの同人誌も全く売れませんでした・・・)

1978年には、コミックカーニバル（通称コミカ）が中日ビ

ルで開催され、その後、名古屋市公会堂に会場を変更。大盛況を迎えるも終息。参加者が列をなす状況やコスプレが盛んになった状況を危惧した名古屋市に、何年後、会場使用が断られたという話が伝え聞こえてきました。

当時は、私は市の職員として勤務の身、同人誌サークル活動からは少し離れており、何の役にも立ちませんでした。コミカは、東京で商業化の波に飲み込まれそうなコミケットに比して、「創作同人の聖地」と呼ばれていました。それを引っ張って来た「名大漫研」や東海高校漫研OBが中心となった「ドガ」といったサークルの熱意と頑張りによって敬意を表します。

彼らは、「僕らは漫画を描くサークルだ!」と堂々と主張し、人材・力量とも一歩抜き出していた。一方、我らSM研は、「僕らは真面目に研究していこう!」とただただ、少女漫画を読みふけていたのを思い出します。

一応、後輩も含めた我々メンバーの名誉のために付け加えると、我々も創作に励んできたし、「創作が一番偉い」といったヒエラルキーを肯定していません。ついでにSM研という略称は、サドマゾの略称ではなく、少女漫画の略称です。

もう一つ弁明すると…サドマゾを下に観る気もさらさらありません。そもそも漫画自体が「悪書追放」のターゲットだったし、少女漫画への偏見には大変なものがありました。たとえ手塚治虫であっても、そういった対象でした。私が就職した当時でも、「最近の若い奴らは、列車内で漫画を読んでる。」と非難されていたものです。(いわんや少女漫画をや!)

かつて少女漫画は偏見の真ただ中にありました。多くの男（編集者の大半は男性であったし、読まず嫌いの男共が何と多かったことか!）の偏見に対峙し、自らの創作意欲に忠実であろうと、あがいてきた多くの少女漫画家に敬意を表します。彼女たちは革命を実行しその地平を大きく切り開きました。その成果が今の少女漫画にはあります。私は彼女らの手の上で、踊っていられたのを自慢に思います。

とはいえ、「クール・ジャパン」とか、「世界戦略上の重要なコンテンツ」という意味づけには疑問を持ちます。純粋に、少女漫画を楽しんだり、驚いたりしてほしい。そこには、皆さんの知らない世界があるかもしれません。



「大ナゴヤ大学授業風景」(講師が一番楽しんでいた)

Possible! @WEB: NAGOYA

ポッシブル!

**参加者
募集中**



自宅で、ワンコインで、
家族や仲間と一緒に参加できます。



詳しい内容・お申込みはこちらから▶
<https://www.bunka758.or.jp/jigyowebnagoya/>

お問い合わせ Mail: WEB@bunka758.or.jp
TEL: 052-249-9385



参加費(1講座)
500円

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団

#possiblewebnagoya
#おうちで文化芸術



NAGOYA ヴォイシーノベルズ・キャビネット

元気・勇気・感動を与える 短編小説作品募集

だれでも気軽に文芸作品に親しんでいただきたいとの思いで生まれた「NAGOYA ヴォイシーノベルズ・キャビネット」。その専用ウェブサイトに掲載するオリジナル短編小説を募集します。採択された作品は、名古屋を中心に活動する劇団の俳優によって朗読されその臨場感あふれる朗読と一緒にウェブサイト上で公開します。読む人に「元気」「勇気」「感動」を届ける作品や、名古屋の歴史や文化にちなんだ作品をお待ちしております。

応募無料 採択賞金15,000円



QRコードからも専用ウェブサイトをご覧ください。 <https://nagoya-voicynovels-cabinet.com/>

頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881
〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

← 20Hz ← → 20kHz →

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。



A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響 / 映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営



マネっぴ

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行
※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ

〒461-0008 名古屋市中区東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル305
TEL: (052)508-5095 FAX: (052)508-5097 Web: www.mane-pro.com

E-mail: mane-pro@mane-pro.com